

氏名(本籍)	緑川 信之 (東京都)		
学位の種類	博士 (図書館情報学)		
学位記番号	博乙第 2707 号		
学位授与年月日	平成26年 9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	図書館情報メディア研究科		
学位論文題目	図書館分類法におけるファセット概念の展開		
主査	筑波大学 教授	博士(学術)	中山 伸一
副査	筑波大学 教授	博士(文学)	松本 浩一
副査	筑波大学 教授	博士(教育学)	吉田 右子
副査	東洋英和女学院大学 教授	博士(教育学)	金沢 みどり
副査	慶應義塾大学 教授	文学修士	田村 俊作

論文の要旨 (2,000字程度)

本論文で筆者は、分類論や組織化論のテキストブックにおいてファセット概念が曖昧に使われているという状況をふまえ、ファセットを鍵概念として Ranganathan の図書館分類法に対する考え方を明らかにしようとしている。そのため、(1)Ranganathan によるファセット概念の導入が図書館分類法に与えた影響、(2)Ranganathan がファセットと基本カテゴリーの関係をどのようにとらえていたか、(3)Ranganathan が分析合成型分類法とファセット化分類法の関係をどのようにとらえていたかという3つの課題を設定し、関連する文献を筆者が提唱する分類法の構造—表示方法説の視点から分析しながら明らかにしようとしている。

第1章では、分類論のテキストブックにおいて、ファセット概念が曖昧に使われていること、また分析合成型分類法とファセット化分類法、階層構造型分類法と列挙型分類法がそれぞれ同義と扱われていることを背景として、Ranganathan の図書館分類法に対する考え方を上述の3つの課題の切り口で検討することの意義を明らかにし、その際、構造—表示方法説の視点から分析を行うことを示すとともに、本論文全体の構成を示している。

第2章では、まず分類法について、筆者が主張する「構造—表示方法説」の視点から、体系化を試み、階層構造と多次元構造、列挙表示と合成表示を定義している。さらに、複合主題と混合主題という視点で検討を行い、記号法の観点から自由構造分類法の可能性を示唆している。

第3章では、Ranganathan によるファセット概念の導入が図書館分類法に与えた影響を検討するため、DCC, EC, UDC, BC, CC という主要な分類法についてその構造、表示の方法、記号法、ファセット概念の有無をそれぞれの分類法および関連する文献をもとに分析した。その結果、構造は DDC, EC が階層構造、UDC, BC が多次元構造と自由構造、CC が第2版までが多次元構造で第3版以降が多次元構造と自由構造、表示の方法は全てが合成表示、記号法は DDC, EC が単一要素、UDC, BC, CC が独立要素、ファセット概念は全てで

利用していることを明らかにした。その結果をふまえ、ファセット概念が DDC の初期から使われていること、ファセットの組合せと補助表等による合成が助記性を高める効果の点で同等視されたこと、独立要素からなる記号法のみが複合的な主題への対応に効果があるのにファセットの組合せも効果があるととらえられたことによって、ファセットと独立要素からなる記号法の一体化、ファセットの組合せと補助表等による合成の同等視という誤りが生じたことを考察している。

第 4 章では、Ranganathan の考えるファセット概念、ファセットと基本カテゴリーの関係、ファセット化分類法と分析合成型分類法の関係がどのように変遷したかを検討するため、Ranganathan の著作を 3 期に分けてそれぞれの時期の著作の記述を分析した。その結果、1933 年から 1945 年の第 1 期はファセットおよびファセット式の概念が導入され、確立されていく時期で、当初は「区分特性」と呼ばれたファセットが最終的に「区分特性の系列に基づく区分肢の総体」と定義されるに至ったことを示した。1949 年から 1952 年までの第 2 期は基本カテゴリーの役割が変遷していく時期で、当初 Ranganathan は「ファセットが先にあってそれらが基本カテゴリーにまとめられる」という意味で、基本カテゴリーに初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を与えていたが、深い主題への対応とそれによるファセット式の硬直化に対応するため、「基本カテゴリーが先にあって、そこからファセットが体现する」という逆転した役割を与えたことを示した。1957 年から 1969 年までの第 3 期は公準と原理を導入して分類作業の一貫性を担保するとともに、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係を検討した時期で、基本カテゴリーを用いかつ分類作業の一貫性を保つためには、基本カテゴリーに対応する新しいファセットの挿入やそれらの順序などに関する規則（公準と原理）が必要であること、さらに CC の各版における各種分類法の区分が異なることや論文によってファセット化分類法と分析合成型分類法との関係が異なることから Ranganathan の分析合成型分類法の概念が曖昧であることを示した。

第 5 章では、Ranganathan の分析合成型分類法とファセット化分類法の関係に注目し、Vickery の考え方と比較しながら、筆者の提唱する構造—表示方法説の視点から分析した。その結果、Ranganathan は当初分析合成型分類法を多次元構造・自由構造分類法の意味でとらえていたが、その後合成表示の分類法と言う性格も与えていること、ファセット化分類法と分析合成型分類法とは別の概念であると考えていたことを示した。さらに Vickery はファセット分類法と分析合成型分類法、列挙型分類法と階層型分類法をそれぞれ同義として扱っていることを示した。また Ranganathan の基本カテゴリーは最上位のファセットであるのに対し、Vickery の共通ファセットは多くの知識領域に現れるファセットを意味しており、それらが異なる概念であることを示した。

第 6 章では以上の結果を総括し、Ranganathan の図書館分類法研究において複合主題への対応が最も重要な問題の 1 つであり、ファセット概念を導入したことにより、課題を残しながらも、他の図書館分類法研究者よりも図書館分類における問題の本質に迫ったと結論づけている。

審 査 の 要 旨 (2,000 字以上)

【批評】

本論文で筆者は、ファセット概念が曖昧に使われている状況を背景に、ファセット概念を導入した Ranganathan に注目して、(1)その導入が図書館分類法に与えた意義、(2)Ranganathan のファセットと基本カテゴリーの関係の捉え方、さらに(3)Ranganathan の分析合成型分類法とファセット化分類法の関係の捉え方という 3 つの課題を設定し、Ranganathan のファセットに対する考え方を明らかにしようとしている。ここでは、ファセット概念を鍵として Ranganathan の図書館分類の考え方を研究するという目的設定、3つの設定された課題が研究目的とどのように関係するか、それぞれの課題を解決するために採用された研究方法、および得られた成果を中心に批評する。

まず、ファセット概念を鍵として Ranganathan の図書館分類の考え方を明らかにしようという研究目的について論評する。分類法において区分枝に多様な要素が入り込むことは大きな問題である。Ranganathan のファセットは「特定の区分特性に基づいて区分されてできる区分枝の総体」のことであり、この考え方は均一な要素からなる区分枝の構成において重要な概念であるにもかかわらず詳細な研究がなされて来なかった。その意味でファセット概念を鍵として Ranganathan の図書館分類の考え方を明らかにしようという取り組みは、分類論の歴史研究において重要であり、また新規性のある研究目的と考える。しかしながら、Ranganathan の図書館分類の考え方を明らかにすることと、図書館分類自体を明確にすることは明らかに目的が異なる。本研究全体を通じてであるが、図書館分類自体を明確にするという分類論の理論研究の側面が分類論の歴史研究のそこそこに表出していることを指摘しておく。

次に、設定された 3 つの課題が研究目的とどのように関係するかについて論評する。ファセットの導入が図書館分類に与えた意義を明らかにするという課題と Ranganathan のファセットに対する考え方を明らかにしようという研究目的は直接には関連しないように見える。この課題は、Ranganathan のファセットに対する考え方を明らかにしようという研究目的の意義付けをファセットが図書館分類に大きな影響を与えたことに求めているように思われる。その意味で研究目的に関連が無い訳ではないが、その点についての言及は余りない。Ranganathan のファセットと基本カテゴリーの関係の捉え方を明らかにするという課題と Ranganathan のファセットに対する考え方を明らかにしようという研究目的は深く関わっており妥当である。Ranganathan の考える基本カテゴリーは最終的にファセットを新たにつくるために必要な概念であり、その変遷をたどることによりファセットに対する Ranganathan の考え方の変遷を見ることができると考える。Ranganathan の分析合成型分類法とファセット化分類法の関係の捉え方を明らかにするという課題と Ranganathan のファセットに対する考え方を明らかにしようという研究目的も密接に関係しており妥当である。ただ、その関係は筆者の提唱する構造—表示方法説を通して分析合成型分類法とファセット化分類法の違いを分析することにより、Ranganathan のファセットに対する考え方が浮き彫りにされるという間接的な関係である。以上のように、一部曖昧な部分もあるが、全体として設定された課題と研究目的の整合性は取れていると考える。

さらに、それぞれの課題を解決するために採用された研究方法について論評する。本研究は分類論の歴史研究であり、基本的に文献研究の方法論をとることは妥当であると考えられる。膨大な Ranganathan の文献の中からその思考の変遷を探るという地道な作業を確実にこなしたことは、高く評価できる。ただ、分類論における理論研究の側面についての論述は、他の分類理論も射程に入れたより多面的な検証が必要であると考えられる。特に本論文で複合主題と混合主題を区分するために新たに導入された自由構造については、十分な論理的背景が無く、その妥当性については今後の検証が待たれる。

最後に、得られた成果について論評する。ファセット概念が DDC の初期から使われていることを明らかにしたことは、分類論の歴史においては一定の価値がある。しかし、ファセット概念を鍵として Ranganathan の図書館分類の考え方を明らかにするという目的に対しては、ファセットという概念を明示的に導入した時期とそれが明示した後にファセットに対する考え方にどのような変化が起こったかが重要であるが、その点について明確な記述は見られない。ファセットの組合せと補助表等による合成が助記性を高める効果の点で同等視されたこと、独立要素からなる記号法のみが複合的な主題への対応に効果があるのにファセットの組合せも効果があるととらえられたことが、ファセットと独立要素からなる記号法の一体化、ファセットの組合せと補助表等による合成の同等視という誤りを生んだことを考察しているがこれは分類論の歴史を考えるうえで重要な指摘である。第 1 期はファセットおよびファセット式概念が導入・確立され、最終的に「区分特性の系列に基づく区分枝の総体」と定義されるに至った時期、第 2 期は基本カテゴリーの役割を初心者がファセット分析を行う際の手引きから、深い主題への対応とそれによるファセット式の硬直化に対応するためという変換を行った時期、第 3 期は基本カテゴリーを用いつつ分類作業の一貫性を保つためには基本カテゴリーに対応する新しいファセットの挿入やそれらの順序などに関する規則（公準と原理）が必要であることを示した時期であることを明らかにしたことは、Ranganathan の分類法に対する考えの変遷を明確にしたもので、Ranganathan の再評価にもつながる大変重要な成果であると言える。さらに CC の各版における各種分類法の区分が異なることや論文によってファセット化分類法と分析合成型分類法との関係が異なることから Ranganathan の分析合成型分類法概念が曖昧であったことを示したこと、Ranganathan は当初分析合成型分類法を多次元構造・自由構造分類法の意味でとらえていたが、その後合成表示の分類法としての性格も与えていたこと、ファセット化分類法と分析合成型分類法とは別の概念であると考えていたことを示したことは、現状の分類法の混乱の原因を示唆する成果であり高く評価できる。

以上を総括すると、ファセット概念という視点から Ranganathan の図書館分類法に対する考え方を明らかにするという分類論の歴史研究における重要な課題に対して、3つの課題を定めて膨大な文献を緻密に読み解くという作業を行い、Ranganathan の分類に関わる思想の変遷についての新規な知見を得た本論文は高く評価することができ、学位論文としての水準に達しているといえる。

【学力の確認結果】

平成 26 年 8 月 5 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程（論文博士）の学位論文審査に関する内規」第 2 3 項第 3 号に基づく学力の確認を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

【結論】

よって、本学位論文の著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。